

いのちの祭り

瓶の中で阿紀の藍は順調に育っていた。

四つの瓶の中で特に後に仕込んだ二つの強さは抜群だった。昨日辺りから泡を浮かせ始めている。

阿紀も懸命だった。五月のグループ展への出品もさることながら、耕之輔への贈り物であることが阿紀を張り切らせている。

徳島で知った耕之輔のなみなみならぬ努力が大きな刺激になっていた。負けてはいられない。

耕之輔は、春には山口に呼び寄せたいと言ってくれた。この仕事が一つの区切りになるかも知れない。

阿紀は勝手に、衣桁に掛けて展示される着物の前に耕之輔の茶碗を置くことを誇らしく空想してみたりした。糸積みも順調に進んでいた。早く糸染めをして機の作業に掛かりたい。

阿紀は朝起きるとまず祈りを込めて瓶を覗く。色を確かめ、指に掬ってなめてみる。人肌の藍液は口の中に薄酸っぱさを広げる。

耕之輔とは淡路島をドライブしてフェリーボートで明石に渡り、姫路の駅前で別れた。

「私に秘密があるでしょ？」

阿紀が悪戯っぽく言うと、耕之輔は暫く考えていたが、若い頃、飲み屋の女と寝たことがあると、とんでもないことを告白し出した。

「止めて頂戴。そんな話訊いてるんじゃないわ。もっと大きな秘密よ。京都にあった私の着物お持ちでしょ。誰にお着せになるつもり？」

「決まっているじゃないか」

何度別れても、別れはつらい。

すっかりしなければ、と自分を取り戻したのは京都を過ぎてからだだった。切羽詰まった耕之輔の顔が浮かび、津坂や典子の好意を思った時、甘い思いなどに浸ってはいられない、と心に決めていた。

「私、春になったら山口に行くからそのつもりでね」

土産の阿波おどりの人形と一緒にこともなく言つてのけ、弟や弟嫁を驚かせもした。あれから半月、毎日のように電話で話しながら、もう会いたくなくなっている。

電話が鳴った。時計を見ると七時半だ。何時もは八時に鳴るはずの電話だった。手を拭いて受話器をとると、久美子だった。

「お早うございます」

久美子の声はいくらか重かった。

「何かあったの？」

「こんな時間に御免なさい。お義兄さんから電話行く前にと思つて。お義姉さんからよく言つて欲しいの。昨夜も仕事で徹夜よ」

「まあ……」

「このままだとお義兄さん倒れてしまうわ」

「わかりました。よく言つておきます。今どうしてらっしゃるの？」

「まだ仕事場よ。八時まで頑張るんですつて」

「じゃ、直ぐにこちらから電話するわ」

「駄目よ。私が告げ口したつて分かつてしまう。でもシツカリおっしゃつてね。命あつての物種だろうつて」

「疲れてるみたい？」

「当然よ。目の縁なんか真っ黒よ。ひど過ぎるわ」

電話を切つてからも、久美子の息遣いが気になった。

もし自分の存在が耕之輔を焦らせているのだとしたら、どうすればいいのだろう。

ひと思いにこちらから押し掛けて行くのも方法かも知れない。そんなことを思っている時、電話は鳴った。

耕之輔は意外に冷静だった。

「別に焦っているわけじゃないさ。何か掴めた気がして面白くて仕方ないんだ」

「だからつて、軀でも壊したら元も子もないでしょ」

耕之輔はそれには答えず、

「津坂先生が来て下さると電話があつた」

と言つた。耕之輔が焦っている元が分かつた。

「今度はいくらかお目に適う物もあるかも知れない」

「そうだといいわね」

阿紀は津坂院長の温顔を思い出して、真実良かつたと思つた。津坂のことだ、耕之輔の焦りを取り除いてくれるに違いない。

阿紀は電話を切ると、思い切つて京都の津坂病院へ電話を入れた。耕之輔の焦りと疲労のことを耳にいれて諫めて貰うためだった。

津坂は不在だった。先刻、山口へ向け発ったという。

阿紀は耕之輔に津坂のことを知らせる誘惑をやつと我慢した。今耕之輔に必要なのは休養と睡眠だ。津坂が行くと分かれば休むどころではなくなるに違いない。

たすきを掛けて振り返ると四つの瓶が誘っていた。阿紀は思い切つて試し染めを試みることにした。

瓶を大きく掻き混ぜてみる。ゆっくりと渦を作りながら濁った藍液は静かに染を沈めていく。試し糸をそつと浸すと焦茶の水は生き返つたように輝いた。液の中で糸の束を捌くようにしながら充分に浸して持ち上げる。一瞬、鮮やかな緑色の糸が現われ、その緑が見る見る薄藍に変わっていく。二度、三度繰り返すと藍は次第にその濃さを増していった。

「……大丈夫。いける」

窓の光に透かして確かめながら思わず声が出た。あとは何処までこの強さを持ち続けられるかだ。

外に出ると、雪晴れの遠山がくつきり浮き出し、全てが澄み切った感じだった。

阿紀は大きく背伸びをした。澄んだものが胸の底に染みわたる。

津坂が耕之輔を訪ねる現場に居合わせないのは残念だったが、これから全てが正しい方向に動き始めるに違いない。藍もうまく建つてくれたし、紡いだ糸も悪くない。うまくいく時には何でもうまくいくものだ。

「ようしッ。やろう」

阿紀は大きく胸を張ると、午後から直ぐに本染めに入ろうと心に決めた。

部屋に戻つて暦をめくると果たして大安だった。

ものには全て「時」がある。今こそその「時」の到来なのだ。

阿紀は母屋に出掛けて行つた。

「悪いけど、餅米少し貸して頂戴」

「あら、お赤飯？ ……いよいよ染めにかかるのね」

「ええ、一気に本染めよ。 ……今晚は御馳走するわ」

離れに戻つてもう一度、瓶の藍液を確かめてみる。紫を帯びた泡は角度によっては金色にきらめいた。蓋を戻して再び掌を合わせる。

津坂院長が長門湯本に着いたのは昼過ぎだった。駅前の商店街で花屋を探してお供えの花を用意した。

「浅谷窯先代の墓所は何処か分からんかね」

タクシーに乗って訊いてみたが、窯の谷の奥に墓があるから、多分あれだろうと心もとない返事だった。それで、窯場に行つて貰うことにした。

車は短い商店街を抜けると、間もなく家並みははずれて田舎道になる。

その一本道に、多感な津坂はもう鼻水を拭っていた。亡くなった碁敵の表情が昨日のこのようによみがえる。

運転手が怪訝な顔で訊いた。

「浅谷窯で誰か亡くなられたのですか」

「いや、昔の話だ」

お供え花を抱えて涙するのだから誤解されても仕方ない。

土橋を渡って門を入ると庭は窯元特有の粉っぽさで、車はクラクションを鳴らした。

音を聞いて出迎えたのは久美子だった。その風貌ですぐに分かったらしい。固い声で言った。

「いらっしやいませ」

「あんたが久美子さんか。京都の津坂が来たと耕之輔先生に伝えて下さい」

久美子は一瞬ためらい、何か言いかけたが、先に立って庭伝いに座敷へ案内した。

座蒲団を勧めると、久美子は畏まって言った。

「お話ししたいことがあります。後で二人だけで」

「わかりました。伺いましょう」

この娘は自分に好意を持っていないらしい。津坂は敵意をその目に見ていた。それにしても目は澄んでいる。澄み過ぎている。

「これ、バケツにでも入れておいて下さい。後で先代のお墓に詣らせて頂きたいのです」

「お預かりします」

床に先代の書が掛かっていた。「無念無想」とある。無念の字が先代の葛藤の深さを物語っていた。

廊下に足音がして耕之輔が現われた。

「先生、遠いところをわざわざ申し訳ありません。お待ちしておりました」

津坂は耕之輔の顔を見て声を呑んだ。

耕之輔の顔は寝起きも手伝ってひどいものだった。土気色した顔色はともかく、むくみがあり艶がない。

医者 of 永年の経験で言えば死後の一時期よく見てきたものだった。耕之輔の方で怪訝な顔をした。

「どうかしましたか」

「いや、ひどい顔してるじゃないか。まるで捨て犬の土左衛門だぞ」

津坂もわざと大きな声でオーバーな言い方をした。

「昨夜、徹夜したものですから」

「フン、若いと思ってももう無理は利かんぞ」

久美子が相変らず固い顔で菓子を運んできた。

「あの人の妹さんだな」

わざと挑発するように言う。

「そうです。久美子と言います」

「このお嬢さんは私が憎いらしい。それも分かる。この饅頭は大丈夫だろうね、毒の方は」
「出来るものなら入れたいとこですけど……」

津坂は突然蛮声をあげて笑い出した。

「ハハハ、ハハハ、……これは大した御仁だ」

久美子は黙ったまま出ていった。

「一途ですが、気だてはいい娘なのです」

「分かるとるよ」

暫くして、久美子は蔭立てした茶を運んできた。盆に大小二つの井戸茶碗が載っていた。

「清水にも挨拶に出るようになってくれないか」

「今参ります」

津坂は目の前に置かれた井戸の茶碗をじっと見詰めていた。見据えているという感じである。

「如何でしょう。先日電話で話した作品です」

耕之輔の前の小振りな茶碗も手元に引き寄せ二つ並べて見始めた。不作法極まる振舞い

だと久美子は文句の一つも言いたかったが適当な言葉が見付からない。

「うん、やっぱりこつちで頂こう」

津坂は自分の前に置かれた大きな方を手にした。

「今の僕ではぎりぎりのところ、こんなところですよ」

津坂は黙って飲んだ。大振りな井戸に津坂の顔がまるまる隠れる。耕之輔も久美子も津

坂の次の言葉を待った。

両手の茶碗は二度三度と傾いたが津坂の顔はなかなか現われない。

その茶碗が震えていると気が付いた時、茶碗の中から津坂の号泣が聞こえていた。それは獅子が吠えるように響いていった。

耕之輔も久美子も瞬間何が起こったのか分からなかった。津坂の多感さは常識を超えている。しかし、その昂りは直ぐに二人を包み込んだ。理屈ではなかった。響きが響きのまま胸を衝いた。

津坂は一度、茶碗を高く捧げるようにして置くと、恥ずかしそうに縁側に立った。

「うむ。……こゝまでやったか」

そう言った様に聞こえたが、耕之輔にも定かではなかった。彼も泣いていたからだ。

津坂にハンカチを差し出したのは久美子だった。

津坂はハンカチを奪うようにして庭へ去った。

「お義兄さん、よかったわね」

見送って久美子が言った。耕之輔は土気色の顔をくしゃくしゃにして見送っていた。

「行ってさしあげたら……？」

暫くして津坂と耕之輔は奥の墓地に立っていた。歴代の坂戸耕之輔とその家族の墓が並んでいる。一つだけ白く新しいのが先代の碑だった。

二人はその碑を背にして谷あいを見下ろしていた。長い無言だった。冬の谷は焦げっばい緑と黄土色だ。

津坂は先刻、仕事場で膨大な量の耕之輔の成果を見せられたばかりだった。無言はなお続いていく。

「それで疲れは感じないのかい？」

やっと医者の顔で津坂が訊いた。

「勿論、ないわけではありませんが……でも知って良かったと思ってます」

冷静に答える耕之輔を風が足元から掃いた。

「無茶苦茶だ。無茶苦茶過ぎる」

吐き出すように言う津坂の顔は青ざめていた。

「無茶かも知れません。しかし、僕にはこの今の時間の方が大事なのです。寝たまま少しばかり長らえたところで周囲に迷惑を掛けるだけです。それよりは充実した今を……少し

でも何かを残して……だからやれたのだと思います」

「口惜しくないのか」

耕之輔は何も言わなかった。

「愚問だった。……人間誰でも行き倒れだ」

津坂のぼつりと吐いた言葉を松籟が掻き消した。

「で、その医者は何と言っとるんだ？」

「うまくいけば、まだ三月は働けるだろうと……その間に彼女に残せるだけのものを残さなければならぬのです。やるしかありません」

「彼女は知らないんだな」

「ええ。……残酷過ぎます」

耕之輔が末期の癌であることを知らされたのはつい最近のことだった。初子との間に離婚のやり取りがあった時、ひどい疲れを感じた。今までにない疲れだった。確実に知ったのは越後から京都を回って帰った半月後である。

それは天罰のように突然耕之輔を襲った。頑健過ぎるほど健康で軀には自信を持っていた彼が、あまりの疲労に病院を訪ねた検査からだった。浅谷窯の問題があり、妻との離婚のことがあり、阿紀との将来のことがある、そんなことからの疲れとタカを括っていた。

十日ほど電話がなく阿紀を悩ませたあの時である。

「知っているのは……？」

「清水と久美子は気が付いているかも知れません。何も言いませんが……」

医者の津坂には、耕之輔の土気色した顔を見た時ピンと来るものがあつた。診療を受けさせねばと思つていた矢先に耕之輔の方から打ち明けられたのだ。

「君のとつた態度が賢明だつたかどうか私には即断出来ない。ただ君が選んだのだからそれに従うしかない。うん、それしかない。……しかし、何故私にだけは打ち明けてくれなかつた。私は医者だぞ！」

「済みません。……お医者さんだから言えなかつたのです」

「私はな、私は……」

津坂は口惜しさから絶句した。腹が立つてならない。運命と言つて諦められる問題ではなかつた。この男は何のために生まれてきたのだ。母の不義から出生に悩み、顔の傷に悩み、先代の重みと不器用に悩み、妻に悩み、今やっと生き甲斐の糸口を見付けようとしてゐる矢先ではないか。それを何で……。「死神よ出て来い！俺が相手になつてやる！」そう空に向かつて叫びたかつた。

津坂は低い声でつぶやいていた。

「つらかつたろう、独りで……。独りで抱えて……」

「先生に打ち明けたのは他でもありません……。藤波阿紀さんのことですが……」

「言うなッ！ 分かつとる！」

「お願い致します」

耕之輔は深ぶかと頭を下げた。

阿紀の藍染は順調だつた。腰が強い藍液は力を落とさない。少し怖くなるほどの染め上がりだつた。

津坂先生はもう着いているに違いない。耕之輔の喜びを電話で確かめたい誘惑を抑えながら、阿紀はひたすら念ずるように糸染めを続けた。

ざっくり束ねた糸を浸しては、藍液の中でさばきながら、ざわざわとゆすつて染めを一樣に均していく単純作業だが、全ての糸の濃さを揃える神経の要る仕事だつた。全て勘と思い切りである。耕之輔が着た時をイメージすることで濃さは統一されていく。

そろそろ赤飯の支度にも掛からなければならぬ。

耕之輔と津坂が窯場に戻つてきたのは墓地に出掛けて小一時間経つてからだつた。

ふたりとも変に抜けた、瓜のような顔をしていた。

「お帰りなさい。寒くなかつたですか」

清水がろくろに向かつたまま迎えた。

「なかなかいい眺めだつたよ。清水さんも先代の頃からだつたね」

「そうです。当時は常時五、六人手伝ってくれてたんですが、僕の不徳から、結局残ってくれたのは彼ひとりでした」

「しかし、あんな美人のお嬢さんを仕とめたんだから元はとれたわけだ」

「……実はそれが目的だったりして。変なこと言わせないで下さい」

清水も何度か電話で話しているので気さくに応じる。

「家の方で熱いコーヒーでも如何ですか」

「有り難う。あのお嬢がたてるコーヒーじゃさぞ芯が立ってるだろうね」

「時には骨が刺さることがありますから御用心下さい」

清水が珍しく冗談を言った。

耕之輔が、久美子に言っておきますから、と出て行くと、津坂は背後からろくろを覗き込んだ。

回転する土の塊の中から汲出し茶碗が生まれるのを黙って見ていたが、清水の手が離れ、切り離されて干し板の上に並べられたところで、津坂は清水の肩に手を置いた。置くというより掴んでグイと押さえている。

「頼むよ、清水君」

清水は両の手を泥まみれにして何も出来ないまま大きくうなずいてみせた。

「先生に御相談したいことがあります」

「窯のことは心配要らん」

「いえ、先生の軀のことです」

「知ってるのか？」

「……やっぱり、そうですか。……悪いんですね」

「良くはない。これからその病院へ行ってカルテを見せて貰おうと思うが遠いのかい？」

「車で二十分程です。御案内します」

「いや、彼には知られん方がいい。町と病院をメモしてくれないか」

「わかりました。……それで、もう手の打ちようは無いんでしょうか？」

「うーむ。……医者に会ってみなければハッキリしたことは言えんが、恐らく無理だろう。

……君はどういう風に聞いとるんだ？」

「ハッキリ聞いたわけではありません」

清水は、耕之輔が医者に通っていることを知って、久美子に後をつけさせたこと、担当医に会って訊いたが詳しくは教えて貰えなかったことなどを話した。

「まだ間に合いますね、と訊いても返事がなかったんです」

「医者も本人から口止めを食らつとるんだよ」

「先生は知ってたんですね。……やっぱり」

「先代の墓前で本人から告白された。……うまくいけば三ヶ月は働けると言われたそうだ」

「……三ヶ月……そ、そんな馬鹿な！」

「そうだよ、馬鹿氣とる。何もかもだ、君たちだって何だ！ お互いに相手のことばかり気を遣って。君たちは耕之輔君のことを気遣い、耕之輔君は君たちに心配させまいとして気遣つとる……まず自分のことを心配しろって言うんだ。そうだろう」

「私たちが心配するのは当然です。そうですね。先生知ってたんですか」

清水は立ち上がると蛇口へ行って手を洗い、顔を洗った。洗い続けた。そして何時までも顔から離さない手拭いの下から叫んだ。

「先生、何とかして下さい」

「……私だって何とかしたいさ。しかしな清水君、今は嘆き悲しんでいる時ではないぞ。人間誰でもいずれは死ぬ。それまでにどれだけ充実した人生を送るかだ。送らせるかだ。そのためにはまだ出来ることはある筈だ。そう思わんかね」

清水はじつと唇を噛んで聞いていた。

そこへ久美子が座敷にコーヒーが入ったことを知らせに来た。

ふたりの気配ですべてを呑み込んだ様だった。

「……!? ……やっぱり、そうだったんですね？」

硬い目が清水に返事を促していた。

「動けるのは三ヶ月だとさ」

ようやく清水が告げた。久美子は何の反応も示さなかった。目が空ろだった。

「それも、うまくいつての話だ」

津坂が清水の言葉を補充する。

「耕之輔先生、何も彼も知ってたんだよ。知ってて俺たちに隠してたんだ。ずるいよ。水臭いよ」

「君たちに心配も迷惑も掛けたくなかった、と言っていた。許してやってくれ」

長い沈黙だった。三人三様ながら、思いの根は一つだ。何に憤ればいいのか遣り場がなかった。

久美子が津坂に何か言おうとしたが、清水がそれを目で制した。

「それでは、芯のあるコーヒーを御馳走になってくるよ。……君たちは当分知らない顔をしてやってくれ給え。問題は越後の藤波阿紀さんだがどうしたものか。君たちも考えておいてくれないか」

津坂は言うだけ言うと言と仕事場を後にした。

久美子の頬をすりと涙が流れて口元で玉となった。

「知ってたからあんな無茶な生活をしたんだよ。時間が無かったんだ先生には」

津坂が裸木の庭伝いに座敷に行くと、耕之輔はコーヒーカップを前に端座していた。瞑目しているように見える。背中がきびしく伸びていた。

津坂は何食わぬ顔で上がり込むと、

「おう、いい匂いがしとるな」

と床柱の前にわざと乱暴に座った。

「先程は失礼しました」

「何を言っとるか。そんなに深刻ぶるとおかしいぞ」

「深刻ぶってなんかいません」

「そんなら、肩の力を抜け。肩に力が入っていたんじや人間自由にはなれん」

津坂がしきりにスプーンでコーヒーカップを掻き混ぜたが、ミルクも砂糖も入ってはいなかった。

「うむ、旨いコーヒーは、ブラックに限る」

津坂は大きく飲むと続けた。

耕之輔が改まって言った。

「小千谷の藤波さんのことですが……」

「うむ……」

津坂は目を閉じて次の言葉を待った。

「彼女は日々結婚の準備をしているのです」

「じゃ、言ってしまうより仕方がないな」

津坂はわざと冷たい言い方をした。

「ええ、言うつもりです」

「言えるのか？」

「仕方ありません」

「お前さん以上につらいのは彼女だぞ」

その夜の赤飯はまず耕之輔の陰膳に供された。

阿紀は糸染めの上がりはかなり満足していた。それも耕之輔のお蔭だと思っている。耕之輔は電話の向こうで「祈っているからね」と言ってくれた。その言い方の余りの優しさに、こんなに幸せでいいのだろうか、と不安になる程だった。幸せに鳥肌立つとはこういうのを言うのだろうか。

阿紀は弟一家との会食を仕事を理由に断わり、ひとりの膳についた。耕之輔の陰膳を下ろしてきて食べるのだ。

「貴方、頂きます」

鬼手のぐい呑の気の抜けたお神酒を頂き、箸を挟んだ両手を合わせる。その箸の一本が落ちて飯台に濁いた音を立てた。急ぎ取り上げながら不吉な予感を慌てて打ち消した。

「私どうかしてるわ」

一日、藍瓶に浸けていた手はお湯に入った後のようにふやけている。何度も洗ったのに爪の奥は藍色に染まっていた。

阿紀はひとり、耕之輔と津坂の会話を想像しながら箸を運んだ。ホテルはあの部屋だろうか。今日もあの池の水音はしているだろうか。耕之輔の話では、珍しく津坂が耕之輔の仕事を褒めてくれたという。それだけで阿紀は満足だった。今頃は熱っぽい陶芸談議に花が咲いているに違いない。京都での津坂の厚意や徳島の耕之輔が思い出された。

「あっちへ行っても忙しくなるわ」

阿紀の頭には、久美子や津坂の着物を染めている自分の姿が浮かんでいた。清水や京都の典子にもお礼をしたいと思う。みんながキューピッドだ。

みんなに幸せになってほしいと思うし、喜んでほしかった。

その頃、洛北のマンションでも初子がひとり夕食のテーブルについていた。食卓にはパックの牛乳と長谷院長が頼んで運ばせた幕の内弁当が二人分並んでいた。長谷は殆ど箸をつけなかった。

長谷院長の来るのは火曜日と土曜日に決まっている。火曜日の午後は大学から若い代診の医者が出るからで、夕方には時間を気にしながら帰っていく。土曜日には十時頃までいることもあるが、今日は医者仲間の会合があるとかで、暗くなるのを待つように先刻帰っていたばかりだった。

テーブルの幕の内弁当はかなりぜいたくなものだったが、汁も生ぬるく鯛の油を浮かせている。

生臭さは、初子とて同じだった。欲望は一応満たされるとしても、胸にあいた空洞が埋まるものではない。はすかいに彼女の胸を空しさが吹き抜けるのは、こうした残骸を前に途方にくれる時だった。

初子にも、長門湯本に一度帰ってこなければならぬのは分かっている。親子でも電話ではラチの明かない問題である。分かっているながら一日延びると一日分足も心も重くなつていく。最近では正枝からの電話も少なくなっていた。長谷とのことも察している節がある。

流しのビニール袋に幕の内の食べ残しを詰めながら、捨てたいのは自分自身なのかも知れないと思っていた。今度やるとしたら失敗は許されぬ。脅しと取られて笑われるだけだ。そう思うと死ぬことさえ億劫に思えてくる。先のことは何も見えていなかった。

窓の彼方に京都の灯が散りばみ、比叡の輪郭だけが際立っていた。この眺めが気に入って決めたのに、今はこの暗さが一番嫌な時間になっていた。

輪郭が一層濃くなってきたのは雲間の月が出るのだろうか。カーテンを引くと、部屋は四角い箱だった。天井の白が変に目を射ってくる。目を閉じると更におぼつかない独りの世界だった。

何時か、長門湯本で洪水のあとの橋桁に引っ掛かった大量の藁屑を見ていたことがあった。あれは小学校に入った年だったろうか。流れの中に揺れながら腐っていった藁屑を今頃突然思い出すのも不思議なことだった。

テレビを点けたが見る気はしない。音だけ流して何時かまた窓外の闇を覗いていた。

その夜、耕之輔がやって来た時、津坂は明るく自然に振る舞った。古い陶器の話に耕之輔も一時我を忘れたかに見えた。無理にすすめられ、久しぶりの酒に酔いの回りも早い。体力もそれだけ弱っているのかも知れなかった。耕之輔は愚痴一つこぼさず、悪酔いしなかった。

旅の疲れからか津坂の方が先に参って横になり、耕之輔は仕方なく、津坂の腰と背中に座蒲団を掛けて部屋を出た。

「直ぐに蒲団を敷いて上げてくれ。ちゃんと着替えて寝るまでしっかり確認してくれよ、大事なお客なんだから」

フロントに念を押してタクシーを頼むと、じっとケース越しに先代の茶碗を見ていた。男仕が蒲団を敷きに部屋に入ると、津坂は起き上がってひとり盃を傾けていた。

「悪いが、もう一組客が来るんだ。蒲団はそっちの部屋に丸めておいてくれればいい」

途中で二度シャックリをした。男仕は津坂を泣き上戸と思ったらしかった。露骨に嫌な

顔をする。

清水と久美子がやって来たのは十一時を回ってからだった。

「お疲れなのに、いいのでしょうか」

「疲れてなんか居られんだろう。……彼、確かに寝たろうな」

「ええ、お義兄さん珍しくお酒飲んだんですね」

「ああ、無理に飲ませた。今は何よりも睡眠が一番だ。……ところで病院のカルテだが…

…

津坂は清水と久美子を前にして事実と医者としての見解を正直に披れきした。

「ただ、あの病院には入れる気になれん」

「分かるような気がします」

清水が重い口を開いた。

「どうにもならないのなら、同じことなのなら、先生に出来るだけの仕事をして頂きたいと思います。今の先生を癒せるのは仕事と越後のあの方だけだと思います」

「だろ。嫌でもそうするしかない……」

「それで三ヶ月は大丈夫なのでしょうか」

久美子が身を乗り出すようにして訊いた。

「保証しろと言われても困るが期待しようじゃないか」

「私、小千谷に行つてこようと思います」

「そして阿紀さんに来てくれと頼むのかい。耕之輔君には何と云つて出掛けるんだ？」

「もちろん、小千谷に行くとは言いません」

「そんな嘘は今の彼には通用せんよ。彼は今最高にナーバスなんだ。……今、私たちが考えなきゃならんのは、彼に充実した最後を送らせてやることだ。そうだろ？ ……あんたの気持ちはよく分かるが、あんたに頼まれてあの人がやって来たんでは、最後の詰めを誤ることにならんだろうか」

「でも、このままだと、二人は会えないまま……」

「私が行く。私は彼女に頼んだりはいしないつもりだ。有りのまゝを伝えるしかない。それで彼女が来てくれれば良し。そうでなければ諦めるしかない。それ以上の無理は言えん」

「お義姉さんきつと来て下さるわ」

「私もそう思いたい。しかし期待するのは止そう。あの人にはあの人的人生があるんだ。

彼女が二の足踏んだつて恨むわけにはいかん」

「それはそうです」

黙っていた清水が久美子を説得するように言った。

「よろしくお願いします」

「……お願いします」

久美子も両手をついて頭を下げた。

「……ありがとう。彼の方は頼むよ」

雪はかなりあつたが、暖かい冬だった。近年とみに暖かく雪も少なくなっている。スキ―場でも雪が少なくて困っている処もあるようだ。

阿紀は今のうちに耕之輔から預かっている上布の雪晒しをしておこうと思つた。

普通、雪晒しは陽射しの強くなる春先にやるのだが、昨今の天候不順では時期を失する恐れもある。それに阿紀の段取りからも早めに済ませておきたかつた。

新聞の天気図やテレビの予報に気を配り、三日は続く無風の晴れ日を選ばなければならぬ。

今朝は朝から高曇りの絶好の条件だった。圭子に手伝つて貰いながら、純白の雪に祖母の織つた上布を広げていく緊張感は何とも言えない清々しさだ。阿紀は念ずる思いで解いて繋ぎ合わせた上布を雪の上に伸ばしていった。

「ここなら、離れの窓からも充分見えるわね」

「多分、風にあおられることは無いと思うけど、やはり気になるものね」

祖母の上布を、孫の自分が里帰りの洗濯が出来ることに阿紀は運命的なものを感じていた。耕之輔とは祖母が引き合わせてくれたに違いない。祖母のアキと先代耕之輔との恋が、

今実を結ぼうとしているのだ。

今朝は山本山が霜降りに見えている。木々の雪が解けかけているに違いない。思い切つてやっつてよかつたと思う。

「お義姉さん、お茶にしましょうか」

「私が入れるわよ、おいしい煎餅があるの」

「あら、……誰かしら？」

圭子の声に顔を上げると、表にタクシーが止まって動き出すところだった。雪面を見詰めていた目には黒いシルエットのようで人までは定かでない。阿紀はとっさに耕之輔を思つた自分が恥ずかしく頬を染めた。

圭子はもう母屋に向かつて歩き出している。

阿紀は一瞬ドキドキした鼓動を押さえながら、もう一度雪の上の上布を振り返っていた。微かな風にほつれた糸が生き物のように震えている。

「お義姉さーんッ！」

やはり自分の客だったか、と手でひさしを作りながら庭に近づくと、雪に滑って転びそうになった。

客は親しそうに手を上げた。

「……？」

「やあ、突然に来て御免よ」

その声に初めて津坂院長と分かった。

「まあ、先生！……どうなさったんですの？」

「来ちまったよ。いや、新潟へ用があつて来たんだが、ここまで来て会つて帰らん手はないと思つてね」

ふたりの親しそうなやり取りを圭子はポカンと見比べていた。

「どうぞ、汚なくしてますけど……」

雪に馴れた目には屋内は暗かった。

「なるほど、これが藍瓶ですか」

津坂は、しばらく染めの土間を見回していたが、織りの仕事場に行くと機の縦糸を長く見詰めていた。

「その折には何から何までお世話になりました……ありがとうございます」

「いやいや、こちらこそ……そうだ、典子が呉々もよろしくと言つとつた。忘れると何を言われるか分からんからね」

阿紀の胸を不吉なものが走る。明るさが今までの津坂でなかった。津坂は阿紀の差し出した座蒲団に腰を落とした。阿紀がお茶を入れている間も沈黙が続いた。阿紀の方から言ひ出さないと津坂の方からは何も出てこない。

「昨夜は何処へお泊まりでしたの？」

「新潟のグランドホテル……」

「呼んで頂けばこちらから参りましたのに……」

「いや、着くのが遅くてね。……それにそんなことをしては耕之輔君に叱られる」

「山口は如何でございましたか？」

「うむ、なかなかいい処だね。……それに耕之輔君もいい物を沢山作っていた」

「お褒め頂いたとかで、とても喜んだ電話でした」

「そうかい……」

「今日はゆっくりして頂けますでしょ？」

阿紀が煎餅の木鉢を置きながら言うのに、津坂は目をそらせた。

「いや、そうもしてられない」

阿紀にも明らかに津坂がいい知らせに來ていないのが分かった。

「先生、何かお話がおりませんか？」

津坂が座り直したので、阿紀は凍る思いだった。

「済まん。……耕之輔君のこと諦めて頂きたい」

阿紀はおのれの耳を疑っていた。考えもしなかったことだった。京都ではあれほど気に入ってくれたではないか。

「ど、どういうことでしょうか。私何か……それとも……いえ、あの人がそうおっしゃっているのでしょうか」

津坂は頭を下げたまま黙って聞いていたが、顔を上げるとその目が真っ赤だった。

「……済まん。……医者でありながら見抜けなくて……耕之輔君は、耕之輔君はね……癌なんだ、それも末期の……」

「いま何とおっしゃいました……？」

しかし、阿紀にはハッキリ聞こえていた。信じられなかったただけだ。

「肝臓癌が主患ということになっているが全身に転移している」

「手の施しようがないとおっしゃるのでしょうか」

「地元の病院のカルテによると普通の生活が出来るのは残り三ヶ月ぐらいだろうと見ています……」

「そ、その後は？ ……寝たきりでも何でもいいんです」

「許してやって下さい。彼も最近知ったのです」

「万に一つも間違いということはないのですか」

「私もそう思いたい……」

阿紀は意外に落ち着いていた。とんでもないことが起こっているというより、何とかならないのかということ一杯だった。自分のことは何処にもなかった。耕之輔を助けない、

何とか出来ないのか。耕之輔の苦しい思いと無念さだけが思われる。

「本当に、手の尽くしようはないのでしょうか」

「……」

阿紀は立ち上がるうとしたが、胸が大きく波打って目の前が白く霞んで転びそうだった。「ひど過ぎるよなあ。私も運命って奴を恨みたいが、恨んだところでどうなるものでもない……ここへ来る間、ずっとそのことを考えてきたが、どうしようもないんだ」

阿紀は聞こえているのかいないのか自分でもよく分からなかった。

「それで、私に出来ることは……？」

津坂は黙って阿紀を見た。見ている内に激情が突き上げてきた。何か言おうとして、口をあくあくさせたが声にならないまま、吠えていた。呼吸だけがけいれんして、その声は号泣というより喉に震える草笛だった。

「何が出来るんでしょう、私に……」

津坂は答えられる息づかいではなかった。子供のように拳で鼻を拭って耐えている。やっとなつたのはかなり経ってからだった。

「先刻、諦めてくれと言いました。それ以上僕たちに何が言えるでしょう。……ただ、一つ……」

津坂は迷っている風だった。

「ただ一つ言えることは、彼は今も元気だし、三ヶ月はまだあるだろうということです。しかし、その後には、苦しい闘病と別れが待っている……」

絞り出すような津坂の言葉を阿紀は空を見詰めるようにして聞いていた。

「浅谷窯の清水君や久美子さんとも相談して私がお知らせすることにしたのです」

「お忙しいのにわざわざ申し訳ありません」

「清水君たちにも言ったのだが、僕たちには何を言う資格もない。また何を希望し、お願いするわけにもいかない。ただ、人間を長くやってきた私としては、一時の感情にとらわれないで考えてほしいということだけだ」

しばらく阿紀は黙ったままだった。

「お言葉ありがとうございます。……私はあの方にお会いして、生まれて初めて、人のために生きることの喜びを知りました。以前若かった頃、或る人に有頂天になって周囲に迷惑を掛けたこともありましたが、人の内側に生きることの喜びなど考えたこともありませんでした。あの方はそれを教えて下さった方です。……私のことを真から考えて下さいました。私の中に入ってそれを教えて下さいました。やっとなつた私にもそれに報いられる時がやっとなつたのかも知れませんが。少し早過ぎましたけど……」

阿紀の物腰は静ひつだった。外見には無常の世の中を知り尽くした尼僧のそれのようにさえ見える。

「私、出来るだけ早くあちらに伺いたいのですけど……よろしいでしょうか」

「しかし、お仕事の都合もあるでしょう」

「仕事はまた出来ます。あの方の場合は……今もそうおっしゃったではありませんか」

「うん、言った。……ただ、私は今ここに来たことを反省しているんだ。良かったのか悪かったのか……」

「でも私は聞いてしまいました。聞いて良かったと思っています。これからの時間は短くともあの方のお傍に暮らせるのです」

「ありがとうございます。……僕も医者として、また友だちとして出来るだけのことはさせて貰うよ。……ありがとう。彼に代って感謝します。ありがとう」

津坂は深く頭を下げたが、阿紀にはもう目の前のことなどないようだった。

「済みません、ちよつと失礼させて頂きます」

頭を下げると阿紀は立って階段をゆっくりと上がって行った。何とかふらつかずに上がった。

二階の窓からは雪の苗木に敷かれた雪晒しの上布が見える。阿紀は壁に寄り掛かってそれを見た。

津坂は座り直して、ここに居る自分を見詰めていた。

「本当にこれで良かったのだろうか」

階段の上から、かすかに阿紀のむせぶ声が聞こえてきた。

津坂には長い時間に思われた。身を削られるようだ。医者としても人生の先輩としても言い足りないことが山ほどありながら何も言っていない気がする。何度か二階に声を掛けようとしてためらっていた。

天井からはきしみ一つ聞こえなくなっていた。

真後ろで電話が鳴った。津坂は一瞬電話の向こうに耕之輔を思い、どうしたものかと迷ったが、放っておくことにした。

階段を阿紀が降りてきた。髪の毛が憐れだった。しかし阿紀は冷静だった。

「もしもし、藤波でございます」

相手が名乗ると、阿紀は大きく身震いした。

「ああ、その折には随分お世話になりました。……ええ、先刻お着きになりました。……御心配お掛けして申し訳ありません。……ありがとう。大丈夫よ。典子さんがお泣きになっちゃおかしいわ。私が我慢しているのに……そうよ典子さん、しっかりなさって」

「あのバカが……！」

津坂がほとほと呆れたようになつた。

「ええ、私って意外に凶太いの。死神に負けたりはしないわ。最後まで闘ってやる……闘ってやるわ。負けるもんですか」

津坂が強引に受話機を奪った。

「……馬鹿者ッ！ 何をゴタゴタ言っとるんだ。藤波さんは大丈夫。困ったものはそっちの方だ。……それで何の用だ!? ……それくらいのこと自分で処理出来んのか。全く困ったもんだ」

視野の端で阿紀が扉を開けて表に出て行くのが分かった。津坂は簡単に指示を与えてから付け足した。

「……ありがとう。助かったよ。今彼女は表に出て行った。そりやつらいに決まっとるが……彼女は立派だった。……そんなことお前に言われんでも分かっとる。バカ泣くな。泣きたいのはこっちの方だ。……じゃ、なるべく早く帰るが、そっちは頼んだぞ」

津坂は受話機を置きながら、耕之輔にその時が来たら典子を送り込もうと思っていた。その間、娘の面倒は俺が見るしかあるまい。くたくたに草臥れ果てて帰ってくる典子の姿が見えるようだった。そんな彼女をそのまま放り出すわけにはいくまい。

表に出ると、阿紀は雪の畑の中に小さく立っていた。

遠い雪山の一部が時雨れているのか暗く霞んでいる。曇天の下で、阿紀は胸を張って何かに挑戦しているように見えた。

津坂は阿紀が振り返るのを待ったが、阿紀はその場にうずくまるとゆっくりと雪晒しの上布を巻き取り始めた。旅仕度の第一歩だった。

博多からの上り列車に阿紀は乗っていた。暖冬のせいもあって、煤けた家並みの間には黄色い花さえ垣間見えた。

福岡には飛行機でやって来た。帰らぬつもり荷支度に思わぬ時間が掛かって、気持ちだけが苛立つ毎日だった。何も知らぬ弟たちを説得するのにも思わぬ時間を要した。それでも納得して貰えず、我が儘を通す形での出発になった。本当のことを知ったらもっと難しいことになったろう。

「姉さんには以前のこともあるし、いい年して色狂いしたと言われるぜ」

弟の勝次はそこまで言ったが、阿紀は意に介さなかった。他人にどう見えようとうでも良かった。今の阿紀には一分一秒が大事なのだ。厚狭からの各駅停車がもどかしくてならない。

耕之輔には、藍染に失敗したと言ってあった。だから展覧会出品を諦めたことになっている。

「会いたい。お願い、十日程そちらに行つては駄目？ 私が行つてはお仕事のお邪魔？ 私に会いたくないの？ それでも恋人と言えるの！」

駄々をこねての押し掛け女房だった。津坂や久美子と相談してのことだ。全てが嘘で固められていたが、大根のところまで全てが真実だった。

阿紀は車窓の山々に昨秋の旅を思い出していた。あの時は陽も暮れた墨絵の山々だった。あつという間の半年だったが、燃焼しつくした時間だったと思う。それはこれからも続くだろう。

長門湯本の駅に着くと、木柵から身を乗りだすようにして久美子が待っていた。

「いらっしやい」

「……来たわ」

ふたりはそれだけ言って歩き出した。

「今夜だけはホテルに泊まってね」

「私ならいいのよ。前掛けもここに入れてきてるの」

「駄目よ、お義姉さん。そんな悲しいこと言っちゃ」

ホテルに向かうタクシーの中でも二人は黙ったままだった。運転手には喧嘩している姉妹に見えたかも知れない。二人とも唇を噛んでいた。

ホテルに着くと久美子は打ち合わせと称して、部屋までやって来た。

「それでお軀、どんな具合なの？」

阿紀の一番知りたいことだった。

「今日も仕事場よ。お義兄さん、お義姉さんに一つでも気に入った茶碗を残したいんじゃないかしら」

係の仲居がお茶を置いて去ると久美子が言った。

「お義姉さん、泣きましよう。私にも泣かせて」

二人の女は正面に向き合って泣いた。

別に何の打ち合わせがあるわけでもない。大方のことは電話で話し合ってきた。久美子は気の済むだけ泣くと居ずまいを正して言った。

「私、ひと足先に帰ってますから……。お義兄さん知りませんからね。私たちも知らないの……」

「分かったわ。……タクシー頼んで行きます」

久美子は急須の茶を阿紀の茶碗に注ぎ足して言った。

「悪いんですけど、来週に入ったら私たち一週間ほど留守にします。勝手して申し訳ないんですけど、今の内にとお義姉さんひとりに押し付けて悪いんですけど」

「新婚旅行？」

「清水の両親に挨拶に……」

「確か北海道とかおっしゃっていたわね、清水さん」

「帯広です。義父は帯広のお菓子屋に勤めてるの」

「……おめでとう」

「ざわざわしてて、まるで実感ないんだけど……夫婦なんて所詮こういうものかも知れない

いわね。……そうそう、この週末に、津坂先生またいらして下さるそうです」

「ええ、青島典子さんというナースの方の運転で、車でいらっしやるそうよ」

「なんだ、お義姉さんの方が詳しいんだ」

久美子が帰って行くと、阿紀は縁側に出てしばらく庭の池を見下ろしていた。

清水と久美子が旅行に出るといいうのも、耕之輔と阿紀を二人だけにするために計画されたことに違いない。

「私の新婚旅行もその一週間なんだわ」

耕之輔というひとりの男のいのちに関わって生きることの有り難さをこれほど切実に感じたことはなかった。

津坂にしる久美子にしる、暖かい流れの中に包まれて今耕之輔と二人で出発しようとしている。どんなに短かくとも、この実感は生涯忘れることはないだろう。

池の面を午後の風に小波が走って去った。

阿紀は鏡に向かって武装する。覚悟を決めて掛からなければならぬ年月が目の前にあった。暗い顔は岩戸の奥に仕舞い込まなければならない。鏡の中に明るい顔を作ると、阿紀はフロントにタクシーを頼んだ。

すみれの紫が目立ち始めた田圃の道を右に折れると車は浅谷窯へ登って行く。小さなバツクミラーに女のまなざしがキラキラと光っていた。

それは今小千谷の離れの瓶の中で、誰知ることもなく咲いている藍の花に似ていた。紫金に輝く泡の花は、いのちの祭りを奏でている。

車はぐらりと回り小さな石橋を渡って窯場へと入って行った。

(終わり)